

# ＜メキシコ・グアダハラにおける継承日本語教室の実践報告＞

## －紙芝居作成を通じた書字能力の習得－

鈴木小百合（神田外語大学）

### 背景

- ・メキシコは120年以上の移民の歴史がある
- ・グアダハラはメキシコ第2の都市であり、戦前からの日系人家族が集住
- ・世代交代が進み、3世以降の日本語・日本文化の保持は難しい状況

↓  
1、2世は子孫に日本語や日本文化を伝えたい

日系3、4世の児童  
5人を対象に継承  
日本語教室を実施

### 実践の概要

目的: 紙芝居作成を通してかなの書字能力を高めることを目指す。

方法: 活動当初は、まだ文字と音が一致せず、50音表を見ながらでないと、かなの読み書きは難しかった。そこで、まず授業では児童がスペイン語で考えた物語を教師が和訳し、それぞれのノートにローマ字で書き取り、各自が家でそれをかなに書き直してくるという活動を行った。

### 活動前の児童の状況

	性別	年齢	世代	日本語		
				学習歴	平仮名	片仮名
A	女	11歳 3ヶ月	日系4世	9ヶ月	なし	98
B	男	11歳 1ヶ月	日系3.5世	15ヶ月	73	5
C	女	10歳 6ヶ月	日系4世	15ヶ月	48	98
D	男	8歳 8ヶ月	日系4世	15ヶ月	25	70
E	女	7歳 7ヶ月	日系4世	15ヶ月	18	25

### 活動の流れ

・二言語の紙芝居完成までに13回セッションが行われ、そのうち3～7回目のセッションでかなの書字能力を高めるための書き取りの練習を行った。

1回目

各自が考えてきた物語を発表し、皆で1つ選び、場面割りを考える

2回目

登場人物の性格を考えながら、物語を推敲して書き直す

3～7回目

教師の和訳をローマ字で書き取り、かなに書き直す

10～13回目

二言語の訳を比較修正し、読む練習をしてから、声を録音する

9回目

二言語の訳を比較修正し、下絵を色塗りする

8回目

物語と各自が描いてきた下絵を確認し、下絵を色塗りする

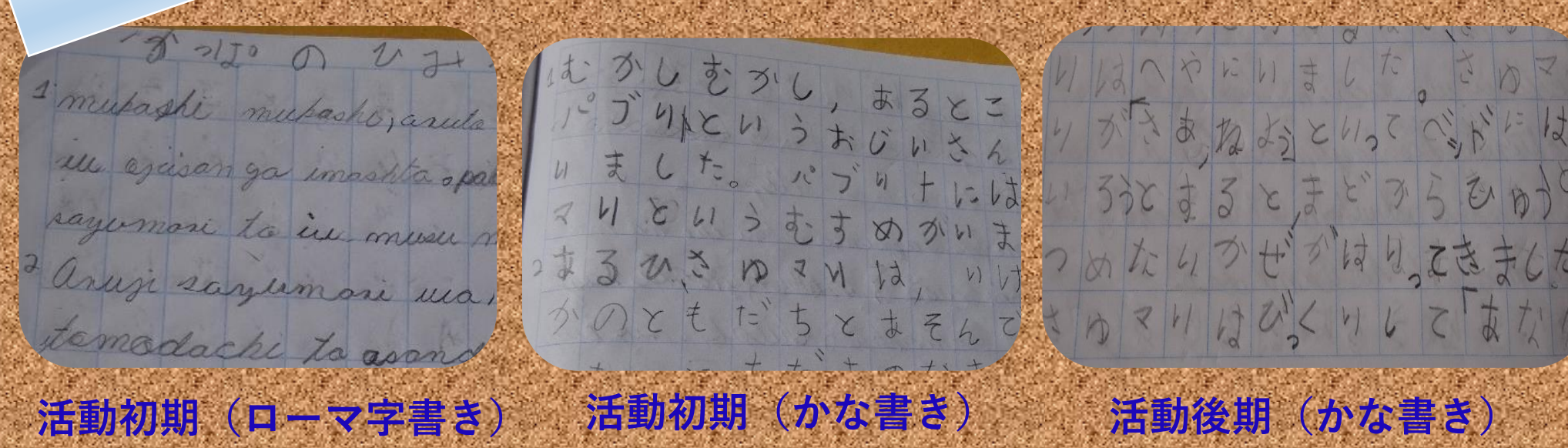
### 結果

- ・物語全11場面のうち、まず高学年のBが第8場面から自発的に直接かな書きを始め、そこから他の児童も倣い、C、A、Dの順で第9場面、Eが第10場面からと、最終的には全員がノートに直接かなで書き取れるようになった。
- ・児童は書き取りの間、同音異字、促音や長音の有無などを教師に確認しながら、はっきりとした文字で和訳を書き取っていった。

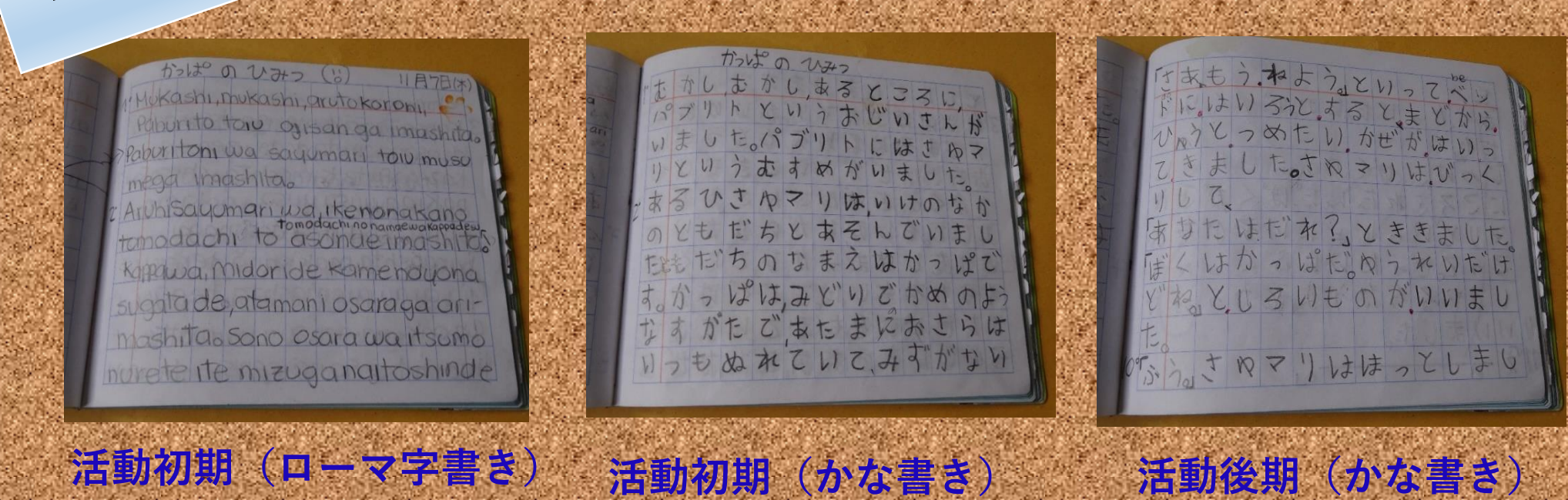


児童たちの学習の様子

Cのノート



Aのノート



作成した紙芝居



### 考察

- ・本教室以外で日本語に接する機会のほとんどない児童でも、短時間、継続することで、母語とは異なる体系の書字能力を身につけるようになった
- ・特に高学年児童の行動をまねて、中学年、低学年と自ら活動のハードルを越えていったのはグループ学習効果の一つだと考えられる
- ・本活動が児童たちにとって、主に平仮名の書字能力の習得に効果的だった理由は、2つ考えられる
  - ① 自分たちで作った作品を書く対象としたため
  - ② 紙芝居の特性(同じ人物の複数回の登場、場面のイメージしやすさ等)により、自分たちの活動を理解し、意義を見出しやすかったため

### 現場への応用と今後の課題

- ・習った知識を実際の運用場面で継続的に主体的に使用する活動を取り入れる
- ・年齢の異なるグループでともに活動を行うことで、低学年の学習が高学年のそれに触発される
- ・片仮名は使用頻度が少なかったこともあり、習得は十分には進まなかった
- ・自分たちが書いた文字を読めても、その意味を十分に理解するまでには至らなかった
- ・今後は、さらに片仮名の書字能力を高める活動や意味と文字を統合させた活動を工夫する必要がある
- ・学習動機維持のためにも、成果を他者に向けて表現する機会を設けることが必要